慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キケロー『ブルートゥス』試訳 (II) : §25～§38
Sub Title	Cicero, Brutus 25-38 : a Japanese translation with a short introduction & notes
Author	小池, 和子(Koike, Wako)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.52 (2021. 3) ,p.141- 152
JaLC DOI	10.14991/005.00000052-0141
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000052-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キケロー『ブルートゥス』試訳（Ⅱ）：§25～§38

小　池　和　子

（1）§25 ～ §51 について

本稿では、前回（本紀要第51号、pp.217-231）に続き、キケロー『ブルートゥス』§25～ §38を訳出する。キケローは§25で、雄弁術（eloquentia）が他の学芸と比べてもとりわけ成立が困難なものであると主張する。そしてそれを裏付ける証拠として、弁論が隆盛を極めたギリシアにおいてですら、その発展が他の学芸と比べて遅かったと指摘し（§26）、以下、§27から§51まで、ギリシアにおける弁論の歴史を概観する。今回訳出する範囲は、この概観部分の前半までであるが、あらかじめ§51までの特徴をここで見ておきたい。

キケローは既に『弁論家について』（前55年）においても、ギリシアにおける弁論の歴史の概観を行っており（*de or*. 2, 93-95）、それとの比較がここでは有効だろう。『ブルートゥス』には、時代の区分の仕方や、取り上げられる弁論家の名前などに『弁論家について』と共通する点が少なからず認められ、キケローがかつての記述を念頭に執筆したことをうかがわせる。しかし、異なる点も少なくない。

第一に、対象とする時代の幅が異なる。『弁論家について』では、時代によって主流となる弁論の流儀が変わることを示す実例としてギリシアの弁論の歴史が引き合いに出されるため、読める形で弁論が残っている前5世紀のペリクレース（とアルキビアデース）から話が始まる。そして最後は前2世紀末の、当該部分の話者アントーニウスが実際に聴いたというアラバンダの

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 52 号（2021）pp.141~152

メネクレースとヒエロクレースで終わる。これに対して、『ブルートゥス』の方は、やはり基本的にはペリクレース（とトゥーキューディデース）を起点とするものの、弁論家に類する存在であったと推測される前6世紀のペイシストラトスやソローンにも遡って触れている。そして、最後はいわゆる「アジア風」の弁論の誕生期（前3世紀初頭）、弁論家で言えばパレーロンのデーメートリオスまでで終わる。

第二に、上のようにペリクレースからデーメートリオスまでの時代は両作品で共通して扱われるわけであるが、その中で特定のグループの人々の扱いに違いがある。『弁論家について』では、イソクラテースの登場を一つの劃期とし、彼の学校から多くの優れた人材が輩出したとして、それを歴史叙述や演示的な弁論を行った人々（テオポンポス、エポロス、ピリストス、ナウクラテース）と、法廷や政治の場で弁論活動を行った人々（デーモステネース、ヒュペレイデース、リュクールゴス、アイスキネース、デイナルコス）の二つのグループに分ける（2, 94）。『ブルートゥス』では、この二つのグループのうち、前者については言及がない。後者については、全く同じ人物が言及されるものの、デーモステネースだけが別格に扱われ（§35）、残りの四人にはもう一人デーマデースが加えられている（§36）。イソクラテースはやはり劃期的な人物として扱われ、彼が教育者であったことも強調されてはいるが（特に§32～§34）、デーモステネースらに与えた影響については特に記されていない。また、『ブルートゥス』では、ゴルギアースやプロータゴラースらのソフィストたちについて言及されるが（特に§30）、『弁論家たちについて』では、少なくとも当該部分には言及がない（しかし3, 127-129で§30とまったく同じ五人が言及される）。

だが、とりわけ大きな違いは、記述量と構成である。『ブルートゥス』の方は、『弁論家について』と比べて遙かに長い。一部の弁論家についての評価が『弁論家について』のそれよりずっと充実しており、さらに、やや脱線的な記述が含まれる[1]こともあるが、特に、前半で上述の時期の主要な弁論

1　とりわけ§41～§43におけるテミストクレースとコリオラーヌスの対比。

家たちをひととおり紹介したあと、後半で再び同じ時期について、雄弁術が発展するための社会的状況についての考察（§45）や、修辞学の発展（アリストテレースの失われた著作からの引用。§46～§48）といった新しい要素を加えてたどりなおすという構成が取られていることが大きな理由である。一部の人物については、前半と後半の両方で取り上げられる。『弁論家について』の方は、時代的には古い方から新しい方へと一方向に下るだけであり、脱線的記述も含まない。

このように、『ブルートゥス』におけるギリシアの弁論の歴史は、『弁論家について』のそれと比べて内容が変更・拡充され、かつ複雑な構成になっていると言える[2]。もっとも、似たような形での説明が繰り返されたり、前半と後半で矛盾とは言わないまでも説明の仕方が異なる箇所もあり、構成については必ずしも成功しているとは言えないように思われる。

例えばペリクレースについて見ると、まず§26で、その弁論を実質的な形で読むことが可能な最古の弁論家の一人として挙げられ、さらに§27で、その優れた人品と共に卓越した弁論能力が言及される。一方、後半の§44では、弁論に技術を導入した最初の人物として取り上げられ、その弁論能力の素晴らしさが称えられる。つまり彼が「（§26と§44で意味は違うものの）最初の人」であり、弁論に優れていた、ということが二重に語られている。またイソクラテースについては、§32では彼が弁論作者（ロゴグラポス）と修辞学教師の活動を並行して行っていたかのように書かれている。しかし§48では、イソクラテースが最初は弁論作者として活動し、しかもその当時は修辞学の技術は否定していたものの、後には修辞学に専念したとするアリストテレースの説明が、そのまま紹介されている。また、雄弁術の成立や弁論家と呼びうる存在の登場は遅かったものの、巧みに話すということそれ自体は、ギリシアにおいて非常に古くから、既にホメーロスの頃から重要な意味を持っていたということは、後半になって初めて言及される（§40）。

最後に、以上のこととは別に、『ブルートゥス』全体の構成という点から

2　Münzerはアッティクスの著作*Liber Annalis*からの影響も推測する（cf. Münzer, pp.79-81）。

一つ付け加えておくと、この§51までの部分は、ブルートゥスとのやりとり（§52）を挟んで§53から始まるローマの弁論家たちの話に入る前に、彼らの先駆者であるギリシアの弁論家たちに触れた格好になっており、その意味で、本題への導入的な役割も果たしている。特に§39～§43にかけて、キケローは何人かのギリシア人について、同時代のローマ人を対応させる（§39：ソローンやペイシストラトス／セルウィウス・トゥッリウス[3]、§41～§43：テミストクレース／コリオラーヌス[4]。また§40では、ホメーロスについて述べた上で、彼がローマの建国者であるロームルスよりずっと古いことが言及される）。読者にギリシアとローマの発展の差を具体的に意識させる工夫と言えるだろう。

（2）§25～§38の構成と主な内容

以上を踏まえつつ、今回取り上げる§25～§38の内容と構成を整理しておくと、以下のようになる。なお、『弁論家について』2, 93-95で言及されない人物は下線で表示し、また、§39～§51で再び取り上げられる人物については〔　〕内にその箇所を表示する。

§25：雄弁術（eloquentia）の成立の困難さ。

§26：ギリシアにおいても、雄弁術は他の学芸と比べて遅れて発展した。

§27～§28冒頭：ペリクレースが資料によってその弁論の実体を知ることが可能な最古の弁論家である。ただし、<u>ペイシストラトス</u>〔§39, §41〕や<u>ソローン</u>〔§39〕、<u>クレイステネース</u>、<u>テミストクレース</u>〔§41～§43〕[5]も雄弁であったと推測できる。

§28～§29：ペリクレース〔§44〕とその同世代または幾らか後の世代

3　伝承によればローマの6代目の王（前578～535年に統治）。

4　グナエウス・マールキウス・コリオラーヌス（前5世紀）。ウォルスキー人との戦争で功績を挙げるも、平民に対する暴虐な振る舞いゆえに追放されると、今度はウォルスキー人を率いてローマに攻撃を仕掛けたとされる人物。

5　『ブルートゥス』の中での言及順。以下も同じ。

の人々（トゥーキューディデース、クレオーン、アルキビアデース、クリティアース、テーラメネース）について。

§30～§31：ゴルギアース〔§47〕、トラシュマコス、プロータゴラース〔§46～§47〕、プロディコス、ヒッピアースらのソフィストの出現と、ソークラテースによる新たな哲学の誕生。

§32～§34：イソクラテース〔§48〕とその功績。

§35：リューシアース〔§48〕とデーモステネース。

§36：ヒュペレイデース、アイスキネース、リュクールゴス、デイナルコス、デーマデース。

§37～§38：デーメートリオスとその功績。

（3）訳文

25. さてここで、私は次のように話した。「雄弁術を称えたり、雄弁の持つ力がどれほどのものであり、雄弁術を追求すればどれほどの威信がもたらされるかを説明したりすることが、今この場で我々に課されているわけではないし、必要とされているわけでもない。だがこのことは、いささかの疑いの余地もなく確言できるだろう。すなわち、雄弁術というものは、何らかの知識によって生まれるものであるにせよ、あるいは何らかの訓練によって、あるいは何らかの素質によってであるにせよ、いずれにせよ、あらゆる物事の中で成立するのが最も困難なものである、ということだ。なぜなら、雄弁術は五つのものから成り立っていると言われているが、それら五つのそれぞれが、それ自体で既に偉大な学術なのだ。それゆえ、五つの極めて偉大な学術[6]を統合したものである雄弁術に、どれほどの力があり、またどれほどの困難さがあるのか、推察できるだろう。

26. ギリシアがその証拠を示してくれる。ギリシアは、雄弁術への情熱に燃え、すでに長きにわたってこの分野で傑出し、他に立ち勝っている。とはいえ、他の全ての学術については、もっと古くから有していたのである。そ

6　inventio（発想）、dispositio（配列）、elocutio（措辞）、memoria（記憶）、actio（口演）の五つ。

してそれらの学術の方は、ギリシア人たちが話すことの力と豊かさ[7]を洗練されたものとするよりもずっと前に、発見されていたのみならず完成してもいたのである。ギリシアに眼を向けるとき、アッティクスよ、とりわけ君の[8]アテーナイが私の眼に浮かび、さながら輝くかのようである。初めて弁論家というものが出現し、また初めて、記念物や書物によって弁論が伝えられるようになったのは、このポリスにおいてだった。**27.** しかし、書かれた作品のいくらかかが伝わっているペリクレース[9]、そしてトゥーキューディデース[10]以前には——彼らは、アテーナイが成長しつつあった時代ではなく、すでに成熟した時代の人たちである[11]——なにがしかの装飾を施され、弁論家のものと思われるようなものは、一文字も残っていない。もっとも、今述べた二人よりもずっと以前の人であるペイシストラトス[12]と、それより少し古いソローン[13]も、さらにその後のクレイステネース[14]も、その当時としては、話すことに大いに長けていたという説はある。**28.** この時代のあと、

7　雄弁術のことを指す。

8　アッティクスに長く（前85年頃～前65年頃）アテーナイで暮らした経験があることから。「アッティクス」の名もそれに由来する（cf. Cic. *Cato* 1）。

9　アテーナイの政治家。前460年代～ペロポンネーソス初期にかけて指導力を発揮。デーロス同盟におけるアテーナイの支配的地位を固めるなど、前5世紀のアテーナイの繁栄に大きく寄与。前429年に、当時アテーナイを襲った疫病で死去（生年は前495年頃）。

10　この略史において、彼はここでは弁論家として扱われているが、歴史的資料としても引用されている（§29、§43、§47）。

11　ペリクレースは『弁論家について』2, 93でも、その弁論を読むことができる最古の弁論家の一人として言及されるが、そこではアルキビアデース（cf. §29）と対になり、トゥーキューディデースはその直後に、彼らと同時代として言及される。

12　アテーナイの僭主。前560年頃から前527年に死去するまで、二度の追放期間を挟みながら三度にわたって統治。

13　アテーナイの政治家・立法家・詩人（生没年不詳。主として前6世紀前半に活躍）。タレースやピッタコスと並ぶ七賢人の一人。

14　アテーナイの政治家（生没年不詳。主として前6世紀末に活躍）。様々な改革を行い、特にオストラキスモスの創案者としばしばみなされる。

アッティクスの著作[15]からもわかるように、ある程度の年月が経ってから、テミストクレースが出た[16]。彼が分別のみならず雄弁においても秀でていたことは確かである。その後にペリクレースが来る[17]。彼はあらゆる類いの徳に恵まれた人であったが、とりわけこの雄弁の才で輝いていた人であった。クレオーンもまたその時代の人である[18]。争いを巻き起こす市民ではあったが、雄弁であったことは間違いない。**29.** この時代とほぼ同時代の人たちに、アルキビアデース[19]、クリティアース[20]、テーラメネースがいる[21]。当時、どの

---

15 原文はex monumentis Attici。monumentisは、§11や§14でも言及されたアッティクスの著作（*Liber Annalis*）のことを指すと解される。『弁論家』120（cognoscat etiam rerum gestarum et memoriae veteris ordinem, maxime scilicet nostrae civitatis sed etiam imperiosorum populorum et regum illustrium）によれば、アッティクスの著作は、ローマ以外の主要な諸外国の歴史も、ある程度含むものだったらしい（前稿で筆者はこの証言を見落としており、*Liber Annalis*がローマの歴史のみを対象とするものとして脚注を記した（当紀要第51号、p.225の注18）ので、ここで訂正・補足する）。なお、AtticiをAtticisと修正する案もあり、最近でもKasterはその修正案を採っている。Kaster p.56及び同n.30を参照。

16 アテーナイの政治家（前525年頃～前459年頃）。ペルシア戦争時にアテーナイを導き、指導者的存在となるが、後に追放される。前述のように、§41～§43では彼とコリオラーヌスが対比される。

17 ここでまた、最初に触れられたペリクレースらの時代に戻る。

18 アテーナイの政治家。ペロポンネーソス戦争時に、主戦論者としてペリクレースと敵対。アンピポリスにおける戦いで将軍として戦うも、敗死（前422年）。彼はいわゆるデマゴーグの最初に名を連ねる人物であり、大衆受けする演説で市民を扇動し、一部からの熱狂的な支持を引き起こす様は、トゥーキューディデースやアリストパネースによって伝えられている。

19 アテーナイの政治家（前450年頃～前404年頃）。ペリクレースの後見の元に育つが、本人は主戦論者で、デマゴーグの典型。ソークラテースの弟子であったこともよく知られている。ヘルメース像破壊事件（前415年）の容疑を受けるとスパルタに亡命するなど、極端で大胆な行為が多く、最後は亡命先のプリュギアで暗殺される。

20 前460年頃に生まれる。プラトーンのおじで、ソークラテースの弟子。30人政権（ペロポンネーソス戦争後の前404年、アテーナイに成立した寡頭政権）の一員となるが、恐怖政治に転じた同政権がトラシュブールス率いる民衆派に打倒された戦いにおいて殺害される（前403年）。

21 アテーナイの政治家。やはり30人政権の一員となるが、クリティアースらと対立し、処刑される（前404年または前403年）。

ような類いの弁論が栄えていたかは、とりわけ、自身も同時代人であるトゥーキューディデースの著作から知ることができる。彼の歴史書は、荘重な言葉遣いで、思想がぎっしりと詰まっており、しかし物事を圧縮して述べることによって簡潔な文体となっているが、まさにそのために、時に意味が少々曖昧である[22]。

30. だがさて、注意深く練られた、何らかの方法に基づいて作り上げられた弁論というものがどれほどの力を持つものかということが知られるや、ただちに弁論の教師も多く存在するようになった。そしてレオンティーノイのゴルギアース[23]、カルケードーンのトラシュマコス[24]、アブデーラのプロータゴラース[25]、ケオスのプロディコス[26]、エリスのヒッピアース[27]が、大いに名を馳せた。同じ時代には、他にも多くの者たちが、実に傲慢な言葉で、弱い案件でも——と、彼らは言っていたのである——いかに弁論によって強くなり得るかを自分たちは教えているのだ、と主張していたものである[28]。**31.** こうした者たちに立ち向かったのがソークラテースである。彼はある種の緊密に

---

22 grandes erant verbis, crebri sententiis, compressione rerum breves et ob eam ipsam causam interdum subobscuri. cf. *de or*. 2, 93 Thucydides, subtiles, acuti, breves, sententiis magis quam verbis abundantes.

23 前485年頃～前380年頃。ソフィスト的弁論の生みの親ともされ、その高名と影響力は、彼自身が対話者の一人として登場するプラトーンの『ゴルギアース』からもうかがい知ることができる。以下、ヒッピアースまでは、やはりソフィストとして知られる人々である。以下の注で示すように、全員が何らかの形でプラトーンの作品に登場する。

24 主として前5世紀後半に活動。プラトーンの『国家』第1巻に対話者の一人として登場する。

25 前490年頃～前420年。ゴルギアースと並び、最も初期のソフィストの一人。プラトーンの対話篇『プロータゴラース』の対話者の一人。「人間は万物の尺度なり」という言葉でも知られる。

26 生没年不詳。プラトーンの複数の対話篇（『プロータゴラース』、『クラテュロス』、『パイドロス』など）に、ソークラテースが彼の教えを受けたという言及がある。

27 生没年不詳。前5世紀～前4世紀初頭に活動。プラトーンの『ヒッピアース（大）』および『ヒッピアース（小）』の二つの対話篇に対話者として登場する。

28 いわゆるソフィストの弱論強弁のことを指す。

構築された議論を用い、連中の教えを＜＊＞[29]言葉で論駁するのを常としていた。この人の豊かな対話から、極めて学識豊かな人たちが生まれた[30]。またこのとき初めて、あの、より古くからあった自然に関する哲学ではなく、善と悪、人の生き方や道徳についての議論が行われる現在の哲学が見出されたのだと言われている。だがこの種の話は、我々が目的としたことからは逸脱しているので、哲学者については別の時に回すことにしよう。話が脱線したもとのところ、弁論家へと戻ることにしよう。**32.** さてそこで、少し前に言及した人たちが老齢となった頃に、イソクラテース[31]が出た。彼の家は、全ギリシアに向けて、まるで弁論の学校か工房のように開かれていた。彼は偉大な弁論家であると共に完璧な教師であり、法廷で輝きを放つことは避けていたものの、私が考えるところではその後誰一人到達し得なかった栄誉を、家の中で[32]育んだ。彼は自分でも多くの作品を見事に書いたが、他人をも教育した。また彼は、他のことでも先人を凌駕したのだが、とりわけ、解き放たれた文章[33]においても、詩の韻律は避けるにせよ何らかの形式とリズムは維持されねばならないということ[34]を、初めて理解したのが彼であった。**33.** というのも、彼以前は、言葉のいわば建造物[35]や、リズムを伴った文の締めくくりといったものは一切存在していなかったからである。あるいは、あったとしても――これは褒め言葉になるだろうが――意図的に追求されたのかはっきりしないものだった。何らかの理論に基づいていたり、規則に従ったりしていたものではなく、むしろ天分によって、また少なからずは

29 「言葉で」（verbis）を限定する何らかの形容詞、ないしは「論駁した」に対する何らかの副詞が欠落したものと考えられる。

30 哲学の諸学派のことを指す。

31 前436～前338年。最初、他人のために弁論を代作する専門的な弁論作者（ロゴグラポス）として名を成したが、前390年頃に修辞学の学校を設立し、以後は修辞学の教師として、当時の弁論に大きな影響を及ぼした。

32 イソクラテースの弁論作者、教師としての活動を指す。

33 原文はsoluta oratione。（韻律の束縛から「解放された」）散文のことを指す。

34 弁論における言葉のリズムについては、例えば『弁論家について』3. 173以下を参照。

35 verborum structura。いわゆる完全文（次の注を参照）を構成することを指す。

偶然によって生じたものだったのである。**34.** なぜなら、本能は〔何も方法を学んでいなくても〕自ら、一つの考えをある種の完全文[36]の形に構成し、完結させるものだからである。そしてその考えが適切な言葉によってまとめられていれば、〔その文章は〕概ねリズミカルな形で終わることにさえなるのである。それは耳が、どういうものが豊かで、どういうものが空虚であるか判別し、また呼吸によっても、ある意味必然的に、文の終わりが作られるからである[37]。息が完全に尽きてしまうのはもちろんのこと、〔息切れして〕苦しむのもみっともない。

35. 当時リューシアースがいたが[38]、彼は自分では法廷での案件に携わることはなかったものの[39]、素晴らしく緻密かつ洗練された書き手であり、もうほとんど完璧な弁論家であると言ってもよいほどである。というのも、問答無用で完璧であり、何一つ欠けたところがないと、何のためらいもなく断言できるのは、デーモステネース[40]についてだろうから。この人の弁論には、

---

36 原文はcircumscriptione ... verborum。ギリシア語のπερίοδος（完全文。一般に先行する従属文と後続の主文から成り、主文の最後の言葉で文全体の意味が完結する、入念に構成された文）の訳語としてキケローが用いる表現の一つ。

37 ここでは息継ぎの必要性も文の終わりを（自然と）リズミカルにすると主張されているように見えるが、『弁論家について』3, 173では、従来は何の工夫もなく終わっていたものを（inconditam antiquorum dicendi consuetudinem）、イソクラテースが変え、リズミカルに終わらせる方法を導入したとされている。

38 『弁論家について』2, 93では、リューシアースはクリティアース及びテーラメネースとグループになっており、2, 94で言及されるイソクラテースより前に置かれている。リューシアースの生没年については諸説ある（前459/8年または前445年頃～前380年頃）が、いずれを取るにせよ前436年生まれのイソクラテースより年長であると考えられるので、『弁論家について』の順序の方が自然である。なお、後半の§48（アリストテレースの失われた修辞学的著作からの引用）では、リューシアースの方が先に置かれている。

39 在留外国人であった彼は、基本的には弁論作者として活動したが、30人政権下で、自分の兄ポレマルコスを死に至らしめた人物を訴追した第12弁論『エラトステネース弾劾』のみは、自ら法廷に立った。

40 前384年～前322年。言わずと知れた、古代ギリシア最大の弁論家。諸ポリスがマケドニア王国に屈していく中、一貫して反マケドニアの活動を繰り返す。最終的には、アレクサンドロス大王の死に乗じて、反乱（ラミア戦争）を主導するも、敗北。マケドニア側が彼を含めた主唱者たちを引き渡すことを要求したため、ア

鋭敏に言うべきこと、こう言って良ければ狡猾に、抜け目なく言うべきことで、見逃したことは何一つなかった。飾らず、簡潔に、また正鵠を射て言うべきところで、彼の使った言葉以上に洗練されたものはなかった。また逆に、壮大で、高揚した調子で言うべきこと、言葉または思考の重厚さで飾って言うべきことで、彼の弁論以上に崇高なものもなかった。**36.** このデーモステネースのすぐ次に来るのがヒュペレイデース[41]とアイスキネース[42]、リュクールゴス[43]、デイナルコス[44]、そして書いたものは何も残っていないがデーマデース[45]、そしてその他多くの人々である。実にこの時代は、このような豊かな実りを生み出したのである。私の考えでは、古い時代の樹液と血液は、この時代の弁論家たちまで損なわれずに続いていた。染料で染めたものではない、自然のままの輝きが、この時代にはあったからである。**37.** さてこれらの人たちが老年になったところに、かのパレーロン出身の青年[46]が後

テーナイを逃れるが、マケドニアの追っ手が迫り、自殺した。キケローは様々な著作において、彼に対する強い敬意と憧れを示している。

41 前389年～前322年。反マケドニアの立場であり、やはりラミア戦争後に逃亡を試みるも、捕まって殺害された。

42 前397年頃～前322年頃。デーモステネースとの敵対関係が知られる。前330年、かつて（前336年）デーモステネースの顕彰を提案したクテーシフォーンを訴追したが、クテーシフォーンを弁護したデーモステネースの弁論（彼の弁論のうちでもとりわけ名高い『冠について』）の前に敗北。その後アテーナイを去ってロドス島に亡命した。

43 デーモステネースとほぼ同世代で、彼の支持者。カイロネイアの戦い（前338年）以後のアテーナイにおいて主導的政治家として活躍し、軍備の増強のみならず、三大悲劇詩人の公式テクストの作成など文化の支援にも尽力した。ラミア戦争の頃には既に死去。

44 前360年頃～前290年頃。コリントス出身で、アテーナイに移住。在留外国人であったため、弁論作者として活動した。テオプラストスやデーメートリオス（§37）とも交流があった。

45 前380年頃～前319年。カイロネイアの戦いで捕虜となり、ピリッポス二世に任じられてアテーナイとの和平交渉にあたり、成立させた。以後、親マケドニアの政治家として活動し、マケドニアとの交渉でもしばしば重要な役割を果たした。

46 デーメートリオス（前360頃～前280年頃、パレーロンはアテーナイの地名）。哲学者テオプラストスの弟子（以下の「テオプラストスの薄暗い木陰から」はそれに言及したもの）。哲学的著作や修辞学的著作を記したが、作品は全て散逸。

を継いだのであるが、彼はこれら全員のうちで最も洗練された人であった。しかし彼は、武器で訓練を積んだと言うよりも、むしろ運動場で訓練を積んだ人だった[47]。それゆえ彼は、アテーナイ人の心を燃え上がらせたというより、むしろ楽しませた。つまり、彼は太陽と砂塵のもとへと進み出たのだが、それは兵士の天幕からではなく、博識きわまりないテオプラストスの薄暗い木陰からだったのである。**38.** この人が初めて、弁論を新しい方向に向け、弁論を柔らかくしなやかなものにした[48]。重厚であるよりも、甘美に——実際彼がそうであったように——見える方を好んだ。人々の心を覆い浸すものであって突き破るものではない甘美さによって。彼はただ、己の弁論の優美さの記憶を聞く人々の心に残そうとしたのであり、エウポリス[49]が伝えるペリクレースとは違い、楽しませると共に傷つけもするようなことは目指していなかったのだ」

主要参考文献

Douglas, A. E. (ed.) *M. Tulli Ciceronis Brutus*. Oxford, 1966.

Hendrickson, G.L. *Cicero, Brutus*, Cambridge. Loeb Classical Library, 1962.

Kaster, R.A. *Cicero: Brutus and Orator*. Oxford, 2020.

Malcovati, H. (ed.) *M. Tulli Ciceronis scripta quae manserunt omnia*, fasc. 4: Brutus. editio altera. Leipzig, 1970.

Münzer, F. “Atticus als Geschichtschreiber” *Hermes* 40 (1905), pp.50-100

Piderit, K. W. & Friedrich, W. *Ciceros Brutus, für den Schulgebrauch*. Leipzig, 1889.

Jahn, O.- Kroll, W. - Kytzler, B. *Cicero, Brutus*. Berlin, 1962.

『弁論術の分析』（片山英男訳、『キケロー選集』第6巻に所収、岩波書店、2000年）。

『弁論家について』（大西英文訳、『キケロー選集』第7巻、岩波書店、1999年。

クィーンティリアーヌスは彼をアテーナイの弁論家の最後に名を連ねる存在としている（*Inst*. 10. 1. 80: ultimus est fere ex Atticis qui dici possit orator）。

47 「武器で」、「運動場で」はいずれも比喩であり、前者は政治や法廷での「戦う」弁論活動を、後者は哲学の議論や称賛演説などを指している。弁論のこのような二つの方向性は、（1）でも述べたように、『弁論家について』ではイソクラテースの弟子たちの二つのグループという形で示されていた。

48 いわゆる「アジア風」の文体（装飾を、ときには過剰なほどにまで多用する華麗な文体）のことを指す。対して、従来の弁論家たちの文体は「アッティカ風」と称され、一般に簡潔かつ平明な文体と特徴付けられる。

49 前420年代に主に活動したアテーナイの喜劇作家。§59参照。